

法に準じた方法を取り、二層縫合は Arbert-Lembert 法を施行し、術後経時的に各群を分けて屠殺剖検を行なった。

各群については、1) 一般検血、血清化学検査、2) 吻合部の経時的形態学的観察、3) 病理組織学的観察、4) Collagen の示標として吻合部を中心とした Hydroxyproline の動態、5) 血中 Fibrinogen の動態等を中心として比較検討した。

病理組織的検索では、1) 各組織層の連続性、2) 吻合部循環障害程度、3) 肉芽形成の3項について、それぞれ5~6細目化し、(一)~(卅)の評価を行ない、これを数値化して比較した。

以上の実験より、1) 術合併症の発生頻度は、一層縫合、二層縫合に有意の差を認めない。2) 組織連続性、吻合部循環障害、形態的狭窄程度では一層吻合が優れている。3) Fibrinogen の動向が術後創傷治癒経過をみる一つの示標となりうる。4) Hydroxyproline の動態は、吻合部1~2cmの間で著明に変動する。等の知見を得、実験的には一層縫合を胃腸吻合に応用可能との結論を得た。

32. 最近経験した外歯瘻について

(口腔外科)

○高橋 信仁・落合 武・河西 一秀

口腔領域の瘻は、いろいろの原因によつて発生するが、われわれが日常の臨床で遭遇する瘻の多くは、歯性化膿症による歯瘻である。歯瘻は、口腔内の粘膜に開口する内歯瘻と、顔面・頸部などの皮膚に形成される外歯瘻とに大別される。

発生部位によつて、頸瘻、眼窩下瘻、頤瘻などという名がつけられている。歯瘻は、慢性顎骨炎の一経過ないし一終局で、独立した疾患ではなく、通常早期に綿密な診断と適切な処置により、歯瘻を形成することなく、治癒せしめ得るものである。

ところが、外歯瘻は内歯瘻と異なり、口腔外に生ずるため、又患者自身が、歯周組織の急性炎症が消退していることが多いので、歯牙に原因のあることを自覚しない者が多いため、外科、整形外科、皮膚科などの医師によつて治療を受ける機会が多く、抗生物質投与、局所の処置に止まり、原発病巣となつた歯牙の処置が行なわれないため、長期にわたつて、瘻孔の閉鎖が見られないで排膿が持続している例が以外に多い。

当科では、原因歯を抜歯するが、歯根根端切除術を行なつて根尖病巣を除去する処置を行なつて、閉鎖治癒しているのを報告した。

33. インドネシアにおける肝疾患の基礎調査

第I報 環境調査および肝機能検査スクリーニングの成績について

(消化器内科)

○藤岡 芳子・小幡 裕・黒川きみえ・林 直諒・安食 億三・田宮 誠・藤原 純江・竹本 忠良

(消化器外科) 金山 和子

(内科) 本田 典子

(外科) 太田 英樹・中野 達也

(寄生虫) 白坂 龍暁

(輸血部) 村上 省三

近年、東南アジア、南アフリカなどの熱帯地域における肝炎、肝硬変、肝癌の原因におよび疫学上の特殊性が問題にされている。

今回、私達はインドネシア国におけるL I P Iおよび厚生省の協力を得、東京女子医大とアイルランガ大学との協同体制により、東部ジャワ、カランカテス地区において、ダム建設に従事しているインドネシア人および日本人を対象にして、以下の如く調査する機会を得た。

調査期間は1972年8月1日から2週間。対象はインドネシア人570名、日本人70名。調査内容は、1) アンケートによる健康調査、環境調査、2) 肝機能検査による肝疾患、潜在性肝障害のスクリーニング、3) オーストラリア抗原、抗体の検索、4) α -フェトプロテイン、5) トキソプラズマ感染の実態などである。ここでは以上のうち、1)と2)について報告した。

1) の健康、環境調査としては、既往歴、食生活、生活環境の調査を行なつたが、既往の肝炎、黄疸、酒歴などはインドネシア人には少なく、日本人に多くみられた。また、インドネシア人の食生活はほとんどの者がバランスのとれた栄養摂取を行なつている。しかし衛生的な面の設備が不十分であり、川や地下水の汚染による伝染性疾患の蔓延が危惧される。

2) のスクリーニングにより肝機能検査として、黄疸指数、GOT、GPT、チモール混濁試験、硫酸亜鉛混濁試験の5項目を行なつた。

その結果、インドネシア人では、肝機能検査異常率は一般に高く、何らかの肝機能障害を認めたものは約20%であり、そのうち疑肝炎者は2.8%であつた。一方、日本人では、肝機能異常者はほぼ同様の成績であるが、疑肝炎者の頻度はより高率であつた。

34. インドネシアにおける肝疾患の基礎調査

第II報 オーストラリア抗原(Au-ag)および抗体

(Au-ab) 保有者について

(消化器内科)

○藤原 純江・小幡 裕・黒川きみえ・
林 直諒・安食 億三・田宮 誠・
藤岡 芳子・竹本 忠良

(消化器外科) 金山 和子

(内科) 本田 典子

(外科) 太田 英樹・中野 達也

(寄生虫) 白坂 龍暁

(輸血部) 村上 省三

インドネシアにおける肝炎ウイルスBの浸潤を調査する目的で、第I報と同一対象例において、Au-ag, Au-abの検索を行なった。検体は、インドネシア人511検体、日本人70検体である。Au-agの検出法は、MO法、SRID法、IES法およびIA法である。なおAu-abはPHA法を行なった。

IA法、PHA法における結果は、インドネシア人では、保有率は、それぞれ、5.7%、27.6%であった。性別では、両者とも、男の方が女に比べ頻度が高い。年齢別では、Au-agに関しては、高令者に陽性率が高く、Au-abに関しては、各年齢層の陽性率に差異がみられない。他方、日本人では、保有率は、Au-ag11.4%、Au-ab17.1%で、本邦日本人に比し高率である。年齢別ではAu-agに関しては、40才以上の高令者に低率で、Au-abは年齢層が増すにつれ増加している。このことは、感染の時期が、インドネシア人では、若年期、高年期ともに比較的高率に存することを示し、日本人では、若年期に高いことを示唆している。

最近、肝癌とAu-agとの関係が、注目されているが、今回の調査で、インドネシア人IA陽性者のTiter分布が低Titerに片寄り、また、駐在日本人IA陽性者の一部にも、低Titer者がみられたが、このようなTiter分布は、日本人肝癌症例のそれと類似している。

今回の調査地域におけるAu-agの特殊性が本邦日本人に検出されているAu-agとheterogeneityがあるのか？また肝癌とどのような関連が存在するのか？今後検討を要する主要な課題である。

35. 過密都市における母親の育児態度

(第1衛生) 光山 恭子

研究目的：人口の都市集中化が最も著しい東京都北区で、小児科医院を開業して15年。人口過密に悩む都会の育児はどのように行なわれているのであろうか。核家族・共働きの母による育児の問題が論じられている今日、育児の実態と母親たちの傾向をよく知ることは、今後の

育児指導のひとつの課題に答えるものと考え、アンケート調査の回答を中心に、地域の母と子のおかれている環境、育児の態度について、その推移と動向を検討した。

研究方法：医院開設15年後1972年の育児アンケート調査を中心として、溯つて1967、1962年を加えた3回の調査結果を比較検討し、その推移と動向をとらえ、考察を加えた。

5年ごとに実施したアンケートは、3回ともに当医院の通院患者をを対象とした。対象児の年齢は0才から就学前の6才までとし、性別・出生順位も問わず、外来診療に2度以上来院している患者に、医院を開設した2月を選び、約1カ月間にアンケート用紙を配布し、回収した。配布枚数は3回とも500枚で、回収はそれぞれ64.0%、74.2%、77.4%であり、配布アンケートの回収状況から、この調査は北区滝野川地区を中心としたものといえる。

調査結果と結語

- 1) 過密都市では母と子のおかれている住宅環境は年々悪化の傾向をたどっている。
- 2) 労働に従事する婦人が増加し、結婚、出産年齢が高くなった。
- 3) 人工流産が増加し、特に若い人に多い。
- 4) 母乳栄養は減少の一途をたどっている。
- 5) 若い世代は親との同居を望まず、育児相談は医師に求める傾向がある。

以上の事実をふまえ、地域に結びついた育児指導を行ない、実地小児科医としての使命を果たしたいと思う。

36. 働く主婦と育児の問題**第II報 台湾の至誠会員の概況**

(台湾・一三會)

○林 梅民・李 慈愛・梁 金菊・
陳 却・梅 素英・葉 瓊玉・
王 一媛・李 絹・鄭 采蘋・
蔡 瓊霞・吳 彩霞・李 佳音

婦人の社会進出に伴ない育児と職業についての悩みは世界各国共通のようである。私共一三會は昨年の本総会において、至誠会員の概況を報告した。今回は台湾の一三會員が台湾の至誠会員の概況について、アンケート調査の集計結果をまとめて見た。

約110人の台湾至誠會員中、他国在住、住所不明を除く80人に対し、第I報と同様のアンケートを発送し、41通の返信を得た。

夫妻同業は87.5%と日本より多く、仕事の態勢として開業は82.5%であり、妊娠、出産、育児のために家事専